

Exchange activities that "weave words and connect people" : Through the two-year "Connecting Our Words" project

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉崎, 哲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029438

教育実践報告

「ことばを紡ぎ、人を繋ぐ」交流活動

—「繋ぐ・私たちの言葉」2年間の事業を通して—

杉崎 哲子

(国語教育系列)

Exchange activities that "weave words and connect people"

—Through the two-year "Connecting Our Words" project—

Satoko SUGIZAKI

要旨

「繋ぐ・私たちの言葉」は、高齢者と学生とが交流しながら「共に学び合う」場として実施したものである。静岡の自然や日々の暮らしに関する思いを共有できるよう、言葉や文字による表現を軸にした「短歌を作る」活動を取り入れて、令和3年度、令和4年度の二年間ともに、それぞれ100名を超えるシニアの方と交流した。

参加された方々は、学生との交流の中で、個々に自分の思いを語り文字や言葉を記しながら楽しく短歌を詠んでいった。書表現や短歌作りなどの創造的な活動は、主体性を呼び起こさせ、認知面にも有効に機能する。広い視野が求められる教員志望の学生にとっても、シニア世代の経験知に触れる機会は貴重で、多くのことを教わりながら言葉を紡ぎ合っていた。支援していた学生が、いつの間にかシニアの方から励まされ支えられていた。シニアの方もそれを自覚して幸福感が高揚したと考えられる。今後の社会参加への発展が期待できる。

キーワード： 交流 短歌 書 ことば 高齢者福祉 地域共生

はじめに

かつての日本には、地域の相互扶助や家族同士の助け合いなど、地域・家庭・職場といった人々の生活の様々な場面に「支え合いの機能」が存在していた。このような地域や家庭が果たしてきた役割の一部を代替する必要性の高まりに対応して、昨今、高齢者や障がい者、子どもなどの対象者ごとに、また生活に必要な機能ごとに、社会保障制度として、公的支援制度の整備と公的支援の充実が図られてきた。

それに加え、一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指して、厚生省では、制度や分野ごとの「縦割り」や「支え手」や「受け手」という関係を超越、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超越つながる「地域共生社会」の構築を提案した¹。これを受けて自治体でも幾つかの事業が展開されている。

筆者は、生涯にわたる健全な社会生活の実現を目指して「しずおかハッピーシニアライフ事業」を展開している静岡市高齢福祉課と協働で、「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業」として、「繋ぐ・私たちの言葉」をテーマに交流活動を実施した。本稿では、令和3年度の「静岡を笑顔に」と令和4年度の「静岡で心豊かに」とを合わせて報告する。

1. 「繋ぐ・私たちの言葉」実施の動機とねらい

地域社会では様々なコミュニティ活動が展開されている。しかし、自治体や学校、企業等、各自の所属に

よって区分けされた限定的なコミュニティに留まっていることが多い。大学生は、下宿生活や遠方からの通学、学業とアルバイト等に時間を要して地域での交流の機会がほとんどなく、高齢者との関わりは、核家族で生活してきた学生の場合には特に希薄である。

一方、静岡市の高齢福祉課では、生涯にわたる健全な社会生活の実現を目指して「しずおかハッピーシニアライフ事業」を展開して様々な取り組みを行っているものの、講座への参加といった受動的な学びで同世代との交流に留まっていることが課題に挙がっていた。

そこで筆者は、高齢者と学生とが「共に学び合う」場を設定しようと考えた。国語、書写書道教育のねらいに「言語活動を通して人との関わりの中で伝え合う力を高める」とあるように、言葉や文字による表現は、交流活動で取り扱う内容として有効である。そこで、「短歌を作る」活動を取り入れることにした。自分の「文字」や「ことば」を導き出して表現できれば、主体的な関わりが期待できると考える。令和3年度は「静岡を笑顔に」をサブタイトルとし、令和4年度には、さらに情動面での深化を期待し「静岡で心豊かに」というテーマを掲げて実践した。

2. 「繋ぐ・私たちの言葉」2ヵ年の実践報告

2.1 令和3年度

「繋ぐ・私たちの言葉—静岡を笑顔に—」

(1) 活動の概要

当初計画では、市内のシニア世代に呼び掛けて 20

名程度の参加者を募り、シニアの方と学生とが一緒に市内をバスで巡って交流する中で短歌を作り、それを短冊に書いて展示する予定であった。しかし、新型コロナの感染拡大によって集団でのバス利用が難しくなったうえに、その頃、世間では特に若者の行動制限が求められていたため、人数制限をし感染防止策を徹底した一会場での実施という計画で参加者を募った。

若者との交流に難色を示されて応募してくれないのではないかと心配だったが、高齢者福祉課から案内していただいたおかげで、シニアクラブや福祉施設を中心に100名程の申込みがあった。それぞれの会場での実施を希望されていたことから、参加者数を制限せずに、市内8ヶ所に出向いて対面交流を行うこととし、メールやFAXでの参加も可能とした。交流による「語る」、思いを記した毛筆書を「飾る」、作成された歌を集めて歌集を作成する「綴る」の三段階で進めた。

◆【語る】

市内各所での対面交流

- ・10/29（金）10：00～11：00（学生3名）
於：由比交流センター(入山シニアクラブ)/17名
- ・11/ 4（木）10：00～11：00（学生3名）
於：清水北部交流センター/10名
- ・11/ 8（月）10：00～11：00（学生2名）
於：静岡天満宮/5名
- ・11/15（月）13：00～14：00（学生3名）
於：船越老人福祉センター/16名
- ・11/22（木）10：00～11：00（学生3名）
於：足久保団地公民館/16名
- ・11/25（木）10：00～11：00（学生3名）
於：清水老人憩いの家清閑さらく荘/10名
- ・11/25（木）13：30～14：30（学生3名）
於：清水南部交流センター/10名
- ・11/26（金）10：00～11：00（学生5名）
於：由比交流センター(由比シニアクラブ)/19名
メール、Fax、手紙（個人参加）/7名

◆【飾る】

- ・12/1～1/28 しずおか焼津信用金庫追手町支店
- ・1/30～2/ 8 静岡市役所静岡庁舎・葵区役所

◆【綴る】

対面交流で生まれた短歌だけでなく、手紙、faxやメールでの交流の方々と学生の歌を収め、市長や学部長、高齢者福祉課の皆さんからも短歌を添えた玉稿をいただいて歌集『繫』を上梓することができた。

この歌集は、参加者全員に配付しただけでなく、交流会場、大学の図書館にも寄贈した。参加した人だけでなく、これを手にした人々が歌の世界に誘われて作者の思いに触れ、誌面上での交流も可能にした。

(2) 活動の様子

<対面交流>

「短歌作りは難しい」と尻込みしている方には、学生との交流がメインであると伝え、対面交流がスムーズに行えるよう事前アンケートとワークシートを送付した。当日に会場に集まる方々には配布できなかったが、定期的集まっているシニアクラブからは、事前にそれに取組んで作った短歌が届いた。

対面交流では、最初に「守りたい(もの)」というテーマで、個々に自分の身近な自然等を見つめ、毛筆で書いてから短歌作りに取り掛かった。今の生活では書字の機会がほとんどないという方が多かったが、久しぶりの毛筆書きを楽しみ、手書きに拘っていた過去を懐かしむ人もいた。自分の脳裏に浮かんだ言葉を文字化すると書き手自身もその視覚情報を客観的に再認識でき、自分の「想い」に関連する言葉をスムーズに紡ぐことができる。「守りたい(もの)」という投げかけによって、SDGsを自分事として意識化できた。

毛筆で書いた「守りたいもの(自然、暮らし、人等)」についての思い出や地域の自然の魅力、辛かった戦争体験などが語られた。それを学生が聞き取り書き留めて短歌作りを支援した。学生には「シニアの方との会話に徹するように」と伝えて、時間内に短歌にしようと焦らず「言葉を預かる」ことをゴールと考えて展開し、時間内にまとめるのが難しい場合は、大学に戻ってから語調を整え短歌を完成させた。

どの会場でも学生が寄り添い発話を引き出したので、最初は遠慮がちだった方からも色んな話を聞くことができ、笑顔溢れる充実した時間となった。

<展示と歌集>

「毛筆書」をパネルに仕立てて展示し、市街地のSDGsコーナーを彩って、道行く人にメッセージを届けた。展示の際には、全ての作品がそれぞれ輝いて見えるよう飾る位置を工夫した。歌集でも同様に、全ての作品が生きるよう、対面交流のページには一人一作品を載せ、同一作者の歌が並ばないようにレイアウトに留意した。全ての短歌を一冊の歌集に掲載することによって、出会ったこともない人の作った歌に共感し、そこに描かれた土地の風景を感じ取るなどして、誰もが一読者としても主体的に関わることができた。

(3) 活動を終えて

人数制限をした一度限りのイベントではなく、日程調整をして出向いた。クラブ等は集う日が決まってお部屋空き状況の都合もあって全て平日の実施となったことから、担当できる学生が限られて時間的に厳しく多忙だったなど、大変なことも多かったが、施設の協力によって100名を超える方との交流が実現した。このことが、最大の成果であると考えている。

計画段階では学生（女子 14 名）が進行役を務める予定で、4 年生を中心に展開を相談していたが、まるで教育実習の「指導計画」のように手順や内容を考えていた。そこで筆者が進行役を務め、学生には担当を決めて数名ずつを支援してもらうことにした。

メールや Fax、手紙での交流も可としたことから、少人数ではあるが、個人の方とも交流することができた。この活動が高成果をもたらした要因は、「支援」に徹したこと、また担当を決めて個別の関わりに責任を持って対応したことにあると考えている。

更に広く展開できればとの思いから、HP 上に掲示板を開設したのだが、実は全く機能しなかった。昨今、ネット上などでのツイートのフォロワー数を気にするなど、若者を中心に広く浅い交流が求められている。しかしシニアの方は、不特定多数との浅い繋がりではなく、明確な相手（学生個人または数名）に着実に「思いを届ける」ことを大切にしていると考えられる。

2.2 令和 4 年度

「繋ぐ・私たちの言葉—静岡で心豊かに—」

(1) 活動の概要

ICT 化の促進に加え、コロナ禍が続いていることに伴い、教育現場では実体験を伴わずに多くの知識を得る場面が多くなっている。広くても浅い表面的な交流が増えた場合、教員になる学生達は、果たして心豊かな社会を構築していくことができるのだろうか。

令和 3 年度の実践を終え、たとえ一度の関わりでも、その時に確かな個と個の心の繋がりが感じられることが重要であることを再確認し、令和 4 年度は、感情を表す言葉を軸にして短歌作りの交流を行うことにした。

令和 3 年度は後期の授業期間中に対面交流を行ったため、出かけられる学生に限られ時間的にも余裕がなく苦労した。そこで令和 4 年度は夏季休業中から日程調整を行い、可能な限り多くの学生に出かけてもらえるようにした。また時間内に短歌を完成できるように、交流時間を 30 分長くし、毛筆で書くことをせず短歌作りに専念できるようにした。

◆【語る】

市内各所での対面交流

- ・ 7/13（水）10：00～11：30（学生 2 名）
於：由比交流センター（今宿シニアクラブ）/11 名
- ・ 8/22（月）13：30～15：00（学生 6 名）
於：船越老人福祉センター/16 名
- ・ 8/26（金）10：00～11：30（学生 5 名）
於：北部交流センター/9 名
- ・ 9/7（水）10：00～11：30（学生 4 名）
於：由比交流センター（入山シニアクラブ）/13 名
- ・ 9/29（木）13：30～15：30（学生 3 名）
於：蒲原老人福祉センター/8 名

- ・ 10/5（水）13：30～15：00（学生 3 名）
於：南部交流センター/11 名
- ・ 10/27（木）13：30～15：00（学生 3 名）
於：折戸老人福祉センター/17 名
- ・ 10/29（土）13：00～15：00（学生 4 名）
於：足久保団地公民館（足久保生き生きクラブ）/14 名

メール（昨年度から継続）/2 名

Fax 他、個別に 4 名も参加

(2) 活動の様子

<交流の様子>

「白熊の画像」を投影し、そこから思い浮かぶ言葉や漢字を書いてもらったところ、ある学生は「抱」と書き「きもちいな 冷たい水もおひさまも この世界はぼくだけのもの」と詠み、別の学生は「愛」の字を挙げて「昼食後 ぶかぶか浮かび 眠くなる あの子を想い抱くドラム缶」と詠んだ。今回の対面交流では、プロジェクターを使って、大学生が作ったこれらの短歌²を紹介しながら活動の流れを伝えた。

「画像」から言葉や漢字を思い浮かべるように、心に残っている懐かしい光景やその時の思いをはじめに書き出し、それを短歌のテーマにしていくと言葉を紡ぎやすくなる。「楽しい」気持ちを表現する場合に、単に「楽しい」と書くだけでなく、そこに実体験に基づいた言葉を加えると、どんな風に楽しかったのか、楽しくて思わずスキップしたのか、鼻歌を口ずさんだのかなど、その時の様子が他者にも生き生きと伝わる。

あるシニアの方は、白熊の画像を見て「抱きまくら 白くま赤ちゃん夢見てる 初孫抱いた弥生の思い出」と、実体験から湧き出た心温まる歌を詠んだ。

令和 4 年度は、メールや Fax、手紙による参加については特に呼びかけなかった。しかし昨年度から引き続いて独居生活の 3 名との交流が続いており定期的に短歌も届いていた。階段から転げ落ちて骨折し外出できなくなった方からは、「メールで繋がっているのでも心強い」というメッセージとともに、教育実習を控えて不安だった学生を励ます言葉が送られてきた。

◆【綴る】 <歌集について>

活動終了時に、静岡市高齢者福祉課の方から、次のような言葉が届いた。

地域特有の言葉が響き、参加された方の笑顔とともに言葉が丁寧に紡がれていく様子を拝見できました。また、交流会後も携帯メール等でコミュニケーションを取りながら冊子を完成させており、学生・シニア双方にとって貴重なふれ合いの機会となったと感じています。会場となった施設等から次年度以降も継続したいとの意見もあり、このような交流の機会が今後も続いていくよう、市としても支援していきたいと思っております。

静岡市長と学部長にも寄稿していただき、誌面上でも交流が実現した。ペーパレスが叫ばれデジタル化が進んでも、ページをめくる触り心地やワクワク感は格別で、活字を目で追い読み味わって歌に込められた想いに共感する。令和4年度も歌集『繫』を上梓する。



令和3年度発行の『繫』

(3) 活動を終えて

令和4年度は、16名の学生（4年：男子1名・女子6名、3年：女子2名、2年：男子4名・女子2名、1年：女子1名）が対面交流を担当した。1年生の1名は国語科ではなく他専修の学生である（イラストの作成は学環の3年生）。

参加者の方に向けて「経験の少ない学生に教えてほしい」と呼び掛けてスタートし、学生達はそれぞれが「経験に裏付けられた、生き生きとした言葉を聞きに行く」という姿勢で対面交流に臨むことにした。

夏季休業中は授業に間に合うよう急いで大学に戻る必要もなかったため、学生も筆者も気持ちにゆとりが持てた。前年度に参加した施設も多く取り組み方が分かっていたことに加えて交流時間を十分に確保したおかげで、ほぼ全員が時間内に歌を作り終えた。付箋を用意して思いついた言葉をどんどん書いていくようにしたのだが、この方法も効果的だった。

最初にプロジェクターでスライドを投影し、若者らしい感覚の学生の歌を紹介した。その画像について考える時間を設けたことによって、一体感をもって取り組むキッカケになったと思われる。

3. 「繫ぐ・私たちの言葉」実践の意義

3.1 「文字」による「想い」の表現

この活動では、高齢者と学生とが交流を通して、言葉を紡ぎ短歌を作った。自分の脳裏に浮かんだ言葉を文字に表して具現化することによって、他者に伝えることが容易になり、書き手本人も、その視覚情報を客観的に再認識することができる。

令和3年度に取り入れた「毛筆で文字を書くこと」に関しては、久々に毛筆を手にする人がほとんどで、懐かしく感じていた一方で、「字がうまくないから恥ずかしい。」「書道は苦手」と思う人も多かった。シニアの方は、過去に受けた教育の影響により、若者以上に書字に対する規範意識が強いようである。しかし、「作品」としてではなく「文字化すること」に意味を持たせて無記名としたため、パネルに仕立てた「書」や歌集に載せたその画像（書）を見た時には、自分

の手から離れた客観的な「文字」を、可視化された「生きた（表面的ではない）言葉」として眺めたのではないだろうか。他者が書いた「命」や「家族」という文字に対しても、それらを「守りたい」という思いに共感していたと考えられる。

令和4年度には、事前の準備や片付け、当日の時間配分にも考慮して「毛筆書」製作をやめ、ワークシートにペン書きしてもらった。それでも自分の「想い」に関連する言葉をスムーズに紡ぐことはできた。しかし、毛筆で書かれた文字は、ワークシート上の文字よりも人に訴えかける力が圧倒的に勝っている。書き手自身も、鑑賞者に向けて、穂先の入れ方や抜き方、運筆の速度や筆圧の強弱から生み出される線質によって、その文字に「想い」を込めるという意図をもって表現することができる。他者に見せることを目的とせずとも、書に取り組む行為自体にも意味がある（そこに精神性を含める一例が写経である）。こうした書の特性を生かす活動も展開したいものである。

3.2 「語る」から「ことばを紡ぐ」

◆一人での「語る」から「紡ぐ」へ

対面交流に参加できず、FAXを活用して参加していた一人暮らしの女性は、いつも通りに朝カーテンを開けた時の光景を、「朝七時 キジ鳩来たり 何拾うこの狭庭で朝の挨拶か」と詠んだ。そして、「歌にすると何気ない日常が一つ一つ輝いて見える。」と続け、夫婦二人で生活していた時には、用を頼まれて返事をする程度の会話で、今まで自分のことを語ることはなかったと振り返った。連れ合いを見送って五年、子ども達はみな遠くに住んでいる。

目の前に話しかける相手がいなくても、FAXの送信先には、学生がいる。そこに向けて「ことば」を紡ぎながら、自分自身にも語りかけている。ことばを紡ぎ短歌にすることによって、感じ方が変わり、暮らし方が能動的になっていったのである。

◆対面交流における「語る」から「紡ぐ」へ

参加者は「学生さんがじっくり聞いてくれたので凄く嬉しかった。」と話していた。語り合いを通して自分の「想い」がハッキリし、徐々にことばを紡いでいく。懐かしい思い出や家族への愛しみの気持ちを語れば、それをシニアの仲間や孫と同年齢の学生が傾きながらじっと聞いている。相手が「想い」を受け止めて認めたり共感してくれたりすると自己肯定感が高まる。

「もの」を作り上げる体験も有意義ではあるが、言葉や文字を取り扱う活動は、それ以上に深く強く情動を揺さぶる高度な学びになる。講座などの受け身の学習が多いシニア世代にとって、身近な自然や自分自身の経験を振り返って他者に向けて語り、自ら文字化し言葉を紡ぐという主体的な活動をするこの意味は大きい。しかもそれは、他者から与えられた題材ではな

く、自分だけの、自分にしか書いたり語ったりできないものであり、経験があってこそその言葉である。それを内面から引き出すために交流による語り合いが生きてくる。共通のテーマを設定して皆が取り組むことができるようにし、画像で映す方法も交流活動を円滑に進めるために効果的であった。

双方が互いの心を想像し共感し合いながら言語化することにより、情動の醸成に機能する。さらに学生達が教職に就けば、今後の静岡を拓く子供たちに働きかけて、健全な文字や言語の使い手の育成に結びつく。高齢者にとっては、学生達や未来の子供たちの心の育成に寄与できることが幸福の高揚に繋がると考える。

3.3 「学び合い」による「支え合い」

教育学部の学生は介護体験で老人ホームに出向くことはあるが、このところコロナ禍でそれが実施されおらず、そもそもこの活動の対象者は介護を要しない方々なので関わり方が全く異なる。この活動でのシニアの方との交流において、学生はシニアの方に対して指導的な立場にはならず、言葉選びのサポートをする場合も、あくまでも支援者であり、「共に学ぶ」関係でいてほしいと考えた。

シニアの方の中には、ボランティアで放課後の学童保育に関わっている人や老人クラブの講師を務めている人もいる。しかしこの活動の中では、そうしたシニアの方であっても指導的立場ではなく、学生と対等の関係になっていただくことになる。ただし初めから「支援」するわけでも「学ぶ」わけでもない。参加者は、皆、主体的に自分の言葉を記すことからスタートするからである。

「傍に寄り添い話に耳を傾ける」「向かい側に居て受け止める」「語り合いの輪の中に入って聞く」など、交流する団体の特徴や会場内の座席や机の配置によって、交流のスタイルや学生の立ち位置は異なる（参考資料：対面交流における学生の位置）が、交流の過程で、言葉と語られた経験とを結びつけて、言葉に対する考えを深めていったと考えられる。これこそが、学生にとっての貴重な学びになっていた。

参加されたシニアの方々は、健康的な身体や強い精神力でしなやかに生活されている。学生が、その時々人生の先輩たちが発して紡ぎ出す言葉に対して敬意をもって耳を傾ければ、具体的な事例や体験を知ることができ、他者の心の動きを捉え自らの感情の表現場面を想起できる。シニアの方からは、将来に不安を抱えている学生たちに向けて、温かい眼差しが注がれていく。ある学生は、「自分は傍に居て話を聞いているだけなのに感謝してもらえて、幸せに思う。」と話す。幸福感を感じ取ることができて、学生自身が救われていく瞬間である。シニアの方もまた、学生の力になれていることを自覚して幸福感が高まっていく。

「共に学ぶ」という交流の在り方とは、主体的な学びからスタートし、それについて語り合う過程を経て、結果的に「支えられている」「支えている」ことを双方が実感できて、共に幸福感を味わうことができるということではないだろうか。

3.4 SDGs への意識高揚

令和3年は、活動開始の早い時期に SDGs の取組みを紹介するディスプレイへの展示が決まっていたことから、「守りたいもの」をテーマにした。交流の最初に、「守りたい」「もの」「自然」「人」「思い出」などの文字を示して短歌にすることを考える手立てとした。

この活動では、SDGs のうちの「13. 気候変動に具体的な対策を」「14. 海の豊かさを守ろう」「15. 陸の豊かさを守ろう」に関する歌が詠まれたが、活動そのものが「3. すべての人に健康と福祉を」に大きく関わっている。そこで、メンバー名を SDKGs（静岡大学の国語を愛する学生達）とした。



令和3年度「南部公民館」にて

【SDGsを意識した短歌（一部）】

- ・降り頻る 驚き続く大雨の 水嵩如何に 佇むわれ
- ・氾濫で幾度も埋もる 登呂の址 畏れ敬まふ 川中天神
- ・世界中 SDGsと 言うけれど 言えぬ白熊 けなげに生きる
- ・焼夷弾 静岡市中 焼き尽くす 追手町生く 樟のみぞしる
- ・駿河湾 軽石来るな 桃色の小 さき命 守り繋ぎたし
- ・地下足袋の 我が育てし 冬野菜 配りて語らう 入山の里
- ・みかんやま 四十分かけ 頂きへ 視線の先には 雄大な富士
- ・守りたい 足久保自然 我が庭も 小鳥飛び交う 裏山の木々

高齢期には幸福感の向上が認められていた時期もあったが、変化が大きく未曾有の事態に遭遇している現代では高齢期にも不安が膨らんでいる。それは、自分や家族の心身の健康だけでなく、今後の社会を担っていく若者に対して、豊かな自然や地域の人との繋がりがなどの大切なものを引き継いでいくことが可能なのだろうかという社会全体に関する不安でもあるのだろう。高齢者に限らず、もともと幸福感を抱きにくい若年層の不安感はさらに大きくなっている。そんな今だからこそ、皆が対等関係にあって互いを認め合う交流が求められている。

4. 心豊かな生活と地域共生の意識化

言葉や文章を記すことによる感情表現の効果について、湯川は、大きく3つに分けて論じている。一つ目は「感情抑制」である。これは、抑制されていた感情を記述することによって、その抑制とそれに伴う認知的負荷が解除されて健康面に改善が見られるというものである。二つ目は「認知適応」であ、感情体験を記述することによって、その体験に対する洞察が深まり、再び体制化したり同化を促進したりした結果、ストレスの軽減や身体的な健康が改善されるという。三つ目は「暴露」で、感情体験の筆記によってストレス負荷が軽減する。筆記することによって、このように、自らの体験の様々な側面や感情に対して注意を促し、それが認知的な再体制化を助けるとまとめている³。

「心」「想い」を表現する方法は、「書」や「短歌」、あるいは、音楽や絵画、ダンスなど、色々あるだろう。令和4年度のテーマを「静岡で心豊かに」としたのは、人と人との関わり方が難しくなっている今、実体験を伴う心温まることばを紡ぎ出して、数多く、それに触れ、言葉や文章を活用した「人と人との繋がりを」を大事にしたいと考えたからである。

高齢者と大学生とが、共にことばを紡ぎ合う場を設定することによって、各々の限定的なコミュニティを異年齢へと広げ展開し、双方にとって心豊かな生活に繋がる幸せな出会いが可能になる。「共に学ぶ」交流によって、異年齢のみならず、多文化共生、バリアフリーも意識化できて他者を認め支え合う社会の実現に近づくことができると考えている。

人生においては、様々な困難に直面することがあるだろう。その時に、人と人との繋がりがあれば、支え合うことができ孤立することなく困難を乗り越えることができる。人と人との繋がりが支え合いとは、一方が与えて、もう一方が受けるということではない。それぞれが役割を持っている関係において成立する。安心した生活や生きがいを感じるような人と人とのつながりの再構築が求められている。

地域社会は、今回かかわった高齢者だけでなく、障がい者、子ども、外国人など、世代や背景の異なる

色々な人々が暮らしており、そのすべての人の生活の本拠地になっている。地域を基盤として人と人との繋がりを育むことが重要である。

したがって教員は、地域社会の一員である子どもを預かるということをおぼえてはならないのだが、学校という限定された空間で長く過ごしていると、時に、そこでしか通用しない感覚に縛られてしまうことがある。実際、この活動の開始時に、学生はシニアの方に対して「教える」立場になろうとしていた。教員の仕事を、「教えること」だと考えていたのである。「学ぶ」のは子ども達自身であり、教員にも「学ばせてもらう」チャンスが与えられている。教員は「学びの場」を提供する役割を担っていると考えている。教育学部の学生だからこそ、こうした自然な交流を経験することによって、地域の人々とのつながりの重要性に気づき、地域で暮らす子ども達との関わりにも生かしてもらいたいと願っている。

おわりに

数日前に突然に妻を亡くして何も手につかず家に引きこもっていた70代の男性を交流の場に誘ったところ、短歌作りの中で、同じような境遇の方に出会って元気が出てきたと話してくれた。

一寸先 闇と思いつ 出た『集い』
帰宅後 すぐに 喪中葉書作る

六十年ぶりの友人との再会を喜んだと話す方は、寂しそうに、こう続けた。実はその友人は認知症が進んでいて、その日、施設に入るところだったのだと。

六十年 再会の笑み このときを
入所の友よ 面忘れしか

この活動の一番初めに会った方は、御年九十四歳。「守りたいもの」を尋ねたら、毛筆で躊躇いなく、「今日」と書いてくれた。

卒寿過ぎ 我が身無理せず 今日(こんにち)も
明日も元気で 居られるを祈る

対面交流に参加し寄せられた歌を詠んだ学生達は、自分の祖父母に会いたくなって思わず電話をかけたと話す。素敵な時間を過ごすことができたと考えている。

守りたい 自然 人々 この暮らし
語り歌にし 皆で願う
語り合う 来し方行く末 この時を
思いのことばよ 雲彩のごと

【付記】この活動は、「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業」として、静岡市保健福祉長寿局・高齢者福祉課から提案された課題「人生100年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！」に参画して実施した。

【令和4年度の対面交流の様子】

学生の位置に注目してふりかえる。



「入山シニアクラブ」や「今宿シニアクラブ」の方々は、比較的年齢の高い方が多く、定期的にその地区から送迎バスを利用して交流館に集まり、体操や歌を歌うなどのリクリエーションを体験されている。机を出さず、学生が数名の方の傍に寄り添い耳を傾けるという形で交流した。



「船越」「蒲原」では、学生は、2名ずつ座っている机の対面に、また「北部」では机の脇に自然に腰を落とす体勢で位置し、聞き取ったり話しかけたりしていた。

このスタイルの場合は全員では相談はしにくいですが、学生は他の場所に移動しやすく、参加者の方にとっては、他の人に影響されることが少ないので、個人で考えたいときに集中できるという利点もある。



「折戸」「南部」では、グループに学生が入って、グループ内で語るスタイルで実施した。みんなが口々に語る事ができ、それを学生やシニアの方が書き留めていながら、言葉を紡いでいった。



「足久保生き生きクラブ」では、継続的に句会を開いて会報にも掲載しているため短歌作りにも抵抗感が少なく、自分の俳句に言葉をつけ加えたり別の視点で表現したりするなど創意工夫している。もっといい表現をと考える時には、自然に近くの人と相談し合う。その輪に学生も含まれている。



令和3年度：SDGsコーナーでの展示
(しずおか焼津信用金庫 追手町支店)

¹ 「地域共生社会」とは、子供・高齢者・障害者など全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる社会のこと(ニッポン一億総活躍プラン：平成28年6月2日閣議決定より)
² 学際科目「地域の人と文字文化」の受講生106名に対して、日本平動物園で撮影された画像(撮影：

山本輝氏)を見て浮かぶ漢字を挙げて短歌を作るという課題を出した。

³ 塚原望「言語を用いた「感情表現」に関する研究の動向」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊26号—2、2019年